

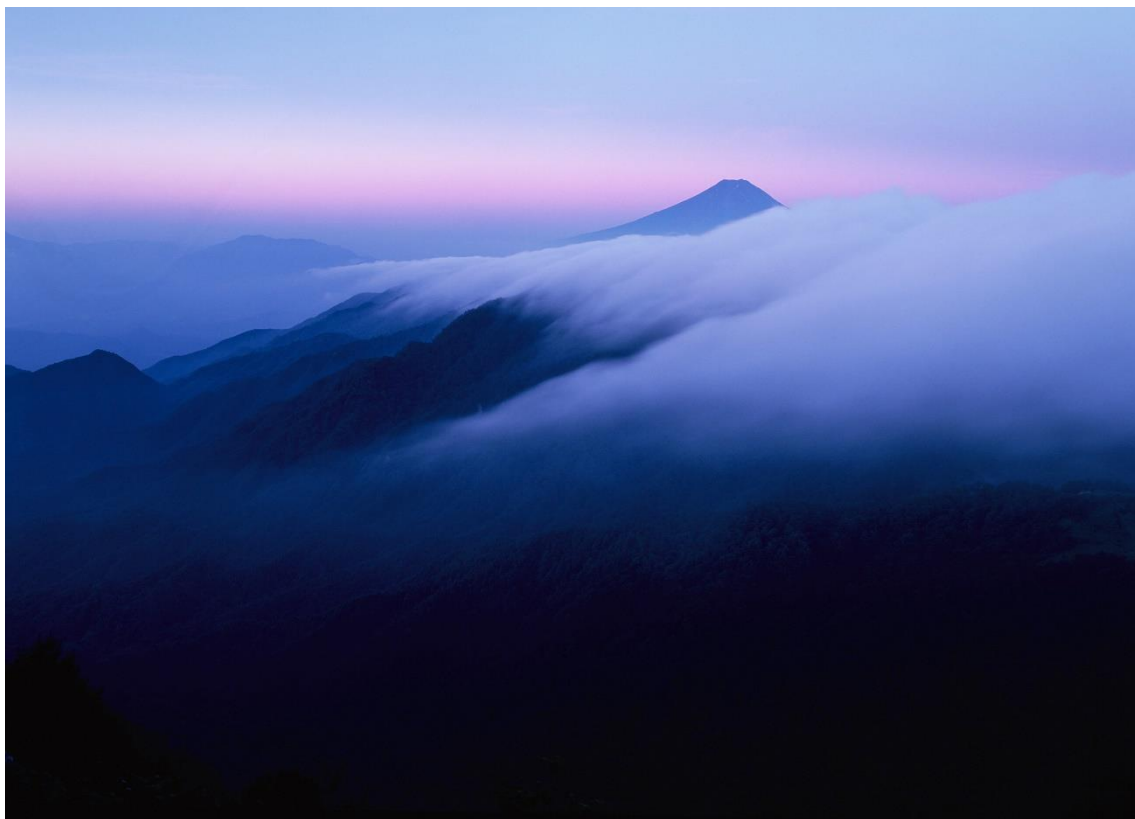
第4回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

滝雲 奈木 正次（静岡県沼津市） 白谷ノ丸

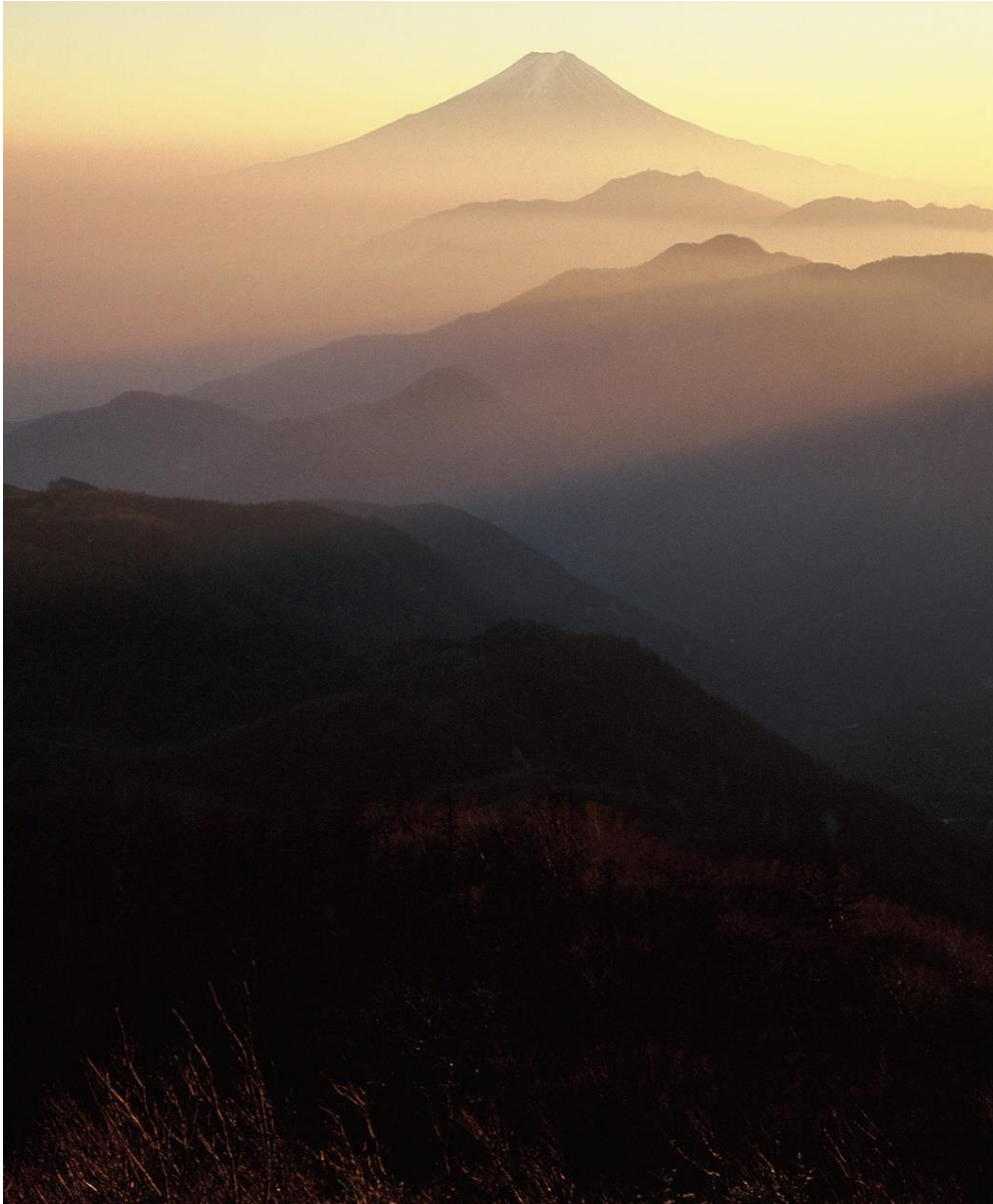


白簾史朗氏講評

第3回に連続しての最高位獲得である。南山稜上を覆って右からなだれ落ちる滝雲上わずかにのぞく富士山。悪天候前の微妙な空の色づきと山体部とのコントラスト、そして何よりも雲の走りと富士山の稜線の組み合わせが絶妙であった。めったにない貴重な条件を見事に捉えたカメラアイに感服、全審査員の一致した最高位入賞であった。

推薦

たそがれの光 鈴木 幸次（東京都葛飾区） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

やや昨年度の最優秀賞作品と同傾向の作品であるが、これも高度の内容を持つ。山の深さ、富士山の高さとなつたそがれの時間帯を表現したいがためにやや損をしている。この場合、夕方の色づいた光と富士山のみで充分であった。しかし、最後まで最優秀を競った秀作であり、これが朝の光であったら、順位はどちらに転んだか予測できない。

推薦

華化粧 藤本 紘一（山梨県都留市） 清八山



白簾史朗氏講評

すっきりと晴れ上がった空に新雪の富士山がのび上がっている。その清新さが際立つが、それをさらに引き立てる手前の雪をまとった樹木がよい。この樹木と中間にある山肌のかげりが一段と富士山に高さをあたえている。でき得るなら右方にある松の枝の赤みをうまく隠したらより美しい画面になったろうと思う。

特選

黎明富士 瀬瀬 浩恭 (岐阜県多治見市) 清八山



白簾史朗氏講評

典型的ともいえる端正なたたずまいを見せる富士山。豪快、優美、繊細、様々な姿態を見せる富士山の素晴らしい一面である。撮影の時間帯、露出値の正確さ、そして何よりも端正さを強調するきっちりとしたフレーミングが、初冬の大気中に燃える朝富士を見事に表現している。何も余計なものを入れず、単純化を狙ったことが成功している。

特選

はためく雲 松里 房子（東京都板橋区） 高川山



白簾史朗氏講評

題名はかならずしも的確とはいえないが、全体の調子のバランス、いの字構図によるオーソドックスな画面構成が優れている。真昼の富士山は割と表現しにくいモチーフであるが、この構図のきまりと画面上半分の調子の締まりが全体に力をおよぼしている。これで中空の雲に動きがあったら、さらに優れた作品となった。

特選

雪花咲く朝 境 実（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

地元の有利さをみごとに生かした作品。昨年度入賞の加藤公夫氏の「雪化粧」も良かったが、その更に一段上に行く出来栄である。雪のついた枝に朝日があたり、あたかも桜花のように見える彼方の赤富士、条件を生かし切ったといえる。右手上方の枝の整理と富士山をもっと左右どちらかに寄せることによって更に高度の作品となろう。

入賞

紅葉の雁ヶ腹摺山

高村 茂（山梨県富士吉田市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

カラマツを配した新雪の富士。構造的に優れている。青空と紅葉の配色もよく、高度の作画力がうかがえる。

入賞

こがね色に染まるやまなみ 竹田 辰巳（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

こがね色のカラマツ林の色づきは最高潮で富士山の新雪もあざやか。充分に季節を見極めての好条件時訪れたことが勝因。

入賞

夏景

奈木 正次（静岡県沼津市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

全部で10点の応募中、実力をもってダブル入賞を克ちとった。アルバイトの厳しいこの山に前山を越えて登ったことへの報い、というより、やはり熱心さの勝利であろう。

入賞

白谷ノ丸眺望

小林 博（山梨県大月市）

白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

白谷ノ丸の一名、白岩ノ丸はこの岩にちなんでいる。それを前景に、対角線上に富士山を配した手法は手馴れたもの。空部を少し切るとよい。

入賞

晩秋の彩

山崎 哲男（神奈川県津久井郡）

奈良倉山



白簞史朗氏講評

単調になりやすい山並と遠景の富士山を右下方のミズナラの紅葉で補っている。やや左方と上部が冗慢の感がある。

入賞

朝もやに映える 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簀史朗氏講評

前・中景の朝もやのムードは実によい。欲をいえばこのもやがもっと昇って遠景の山肌をもっと覆ったほうがよい。富士山の露光オーバーが惜しい。

入賞

閃光 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簀史朗氏講評

題名が画面とマッチしない、閃光にはもっときらめきがなければならないので、もっと別の題の方がよかった。下方を少し切りつめるとよい。

入賞

春醋

山内 かむ志 (栃木県鹿沼市)

岩殿山



白簾史朗氏講評

サクラというモチーフは撮りにくいもののひとつ。色が出にくいし、遠景の富士山までピントが届きにくい。この作品はほぼ及第であるが、左上部の花枝が風でゆれたのが失敗。

入賞

卯月の雪 遠藤 潤（山梨県東八代郡） 高畑山



白簾史朗氏講評

雪後の好天をよく表現したさわやかな作品であるが、惜しむらくはやや露光オーバーである。それと左下方の整理をもう少し考えた方がよくなる。

入賞

ススキ舞う 沼倉 司（山梨県富士吉田市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

ススキの穂が風に舞うのはよいが、それが中途半端で残念。それと富士山にはできるかぎりピントを届かせる工夫をしたい。

入賞

早春残月 丸山 敏章（山梨県山梨市） 高川山



白簾史朗氏講評

これも残念ながら題名がふさわしいとはいえない。ことに残月はもっと早い時間帯のもので、もっと大きく写しこむことが必要。雲をモチーフにした題名を考えたい。

入賞

流れる雲 広瀬 雅英（山梨県富士吉田市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

実際時には雲が流れていても、画面の雲は静止して見える。低速シャッターを利用、雲の流動を写しこむこと。遠景の平らな雲も画面を静かに見せる役目をしている。

総評

審査員長 白籟史朗

あつという間に一年が経過し、この「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」も第4回目をむかえることとなった。今回は昨年度より1ヶ月遅い締め切り、審査であるが、これも第1回から見ると3ヶ月の繰り下げとなっている。このことは気象に大きく関係しており、最近では富士山への冠雪が大幅に遅れることと軌を一にしている。だが、あらゆるコンテストへの参加・スタートはこのこととは関係なく、1年間365日、つねに取り組むべきものであることを心に銘記して欲しい。

さて、第4回に関しての総評であるが、全体的に見て一段レベルアップしたといえる。応募者総数は昨年第3回に比較して8名の減少を見たが、それでも51名の応募で175点の作品は昨年度より7点の増加である。

ただ、一段レベルアップしたとはいっても、それは一部ベテラン作家と新しい応募者の実力の故であって、すべての応募者のレベルアップではない。それに今回もまことに残念ながら昨年度の九鬼山に引きつづいて滝子山からの作品が欠落した。今回最大の応募は大蔵高丸の22名46点で、雁ヶ腹摺山の20名36点がこれに次ぐ。他は清八山・本社ヶ丸の9名16点を頭に百蔵山の5名14点、高川山の9名13点、岩殿山の5名12点とつづくが、牛奥ノ雁ヶ腹摺山は7名10点、新ポイントの奈良倉山は6名11点、扇山の5名10点、高畑山は5名5点九鬼山は2名2点という低調さだった。

地域別に見ると大月市内の応募者は16名で昨年度より10名減、作品数も6点減であった。山梨県内でいうとマイナス5名11点減という数で、その分県外の応募者が7名24点の増加を見た。この現象はこのコンテストがより広く人口に膾炙したことを示しているが、反面、地元作者の怠慢さを露呈したといえる。

ことにアプローチに絶対有利な地元でありながら滝子山、奈良倉山、扇山、百蔵山、岩殿山、高畑山、九鬼山ほかの山へも訪れが少ないことは怠慢さをそしられてもいたしかたあるまい。

第5回目のコンテストは、現在までの1人5点以内という制限を撤廃、同一山頂からのものは2点以内、十二山頂すべてを網羅の場合は12点まで応募できるよう枠を広げた。これで思い切った応募も可能であるので、各位大いに力作を寄せていただきたい。

なお蛇足ながら、応募作品は、衆人環視の中で高品質の作品のみアトランダムに選出、3度の審査を経て、最終審査時に同一作者の重複をチェックするシ

システムであり。すべての入賞作品は全審査員の一致した意見と選出によるものと理解されたい。審査員の選出に裏があるかのような憶測があるやに聞くが、こうしたことは自己の未熟を省ずにする審査員への侮辱といわざるを得ない。